

ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ(2)

～ 過去をまなざしつつ、統一後の新たな再生へ向かって～

吉 田 和比古

ま え が き

今から106年前の1895年12月28日、パリのオペラ座の近くキャプシーヌ街グラン・カフェの地下でリュミール兄弟の手により、世界で初めてシネマトグラフの商業的上映が行われた。「シオタの駅」と題する短いフィルムがスクリーンに映し出され、鉄道の駅に列車が近づいてきて、しだいにその姿が大きくなり、画面の半分以上を覆うにいたって、客の中には驚いて席を立て逃げようとした人がいたというエピソードが伝えられている。こうして映画は誕生した。

1945年5月のナチス・ドイツ敗北から44年を経て、分断国家ドイツは1989年11月9日ベルリンの壁の崩壊の後、1990年に行われた選挙により、長年の悲願であった統一がなし遂げた。実質は、旧東ドイツの西ドイツへの吸収合併という形であった。すでに前回の論文でも一部紹介してきたが、統一後のドイツは、当初の喜びも束の間、性急な統一に伴うさまざまな矛盾が一挙に噴出してきた。そしてそれらの問題はかなりの時間をかけて解決されねばならないことが明らかになりつつある。また1995年は、大戦終了から50周年にあたり、今回取り上げるテレビ番組もかなりの部分が、そうした戦争に関わるテーマが多く含まれている。日本国内そして外国で放映された番組を比較してみると、それぞれの国の大戦へのパースペクティブや、テーマの設定、そしてその掘り下げ方などに当然のことながら偏差も見い出される点は

興味深いものがある。ただ全体としては、明確な被害者国・加害者国といったある意味では単純な二分法を越えて、戦争そのものを両方の国を含めた上で人類の犯した過ちとみなすグローバルな視点が強調されている点は、やはり20世紀がやがて終わろうとする時点における歴史認識の眼差し方の一つの傾向であるということも指摘できる。繰り返しになるが、第2次世界大戦終了後50年という歴史的時間の節目にも当たる1995年、日本のテレビ・メディアは数多くの、いわゆる戦争関連番組の特集を組んだ。その大部分は太平洋戦争に関するものであり、ここでは詳述しないが、本稿でも紹介する国内外の特集番組ないしドキュメンタリー番組は、やはり数の上で第2次大戦にかかわるものが多数見受けられる。ちなみに今回取り上げた50タイトルの映像資料の中で、何本かの劇場公開映画作品も含めて直接的間接的に先の戦争に関連するものは、36タイトルあり、およそ70パーセントにあたる。戦後50年という節目に、テレビの視聴者や映画館に出かけた人は、それぞれの世代に応じて様々な認識を持つことになるであろうが、本稿は、戦後50年というパースペクティブを日本のメディアがどのように規定したかを知るための大きな手がかりを提供するはずである。個々の番組を批判的に読み解く行為(=メディア・リテラシー)に関しては、ここでは深く立ち入らないでおくことにする。ただ一つだけ言えることは、たとえば「ナチス・ドイツの残虐行為」といったステレオタイプ的な評価のもとに、のぞき趣味的に作られる番組はもはやあまり意味をなさないだろうということである。歴史的な事件は、時間がたてばたつほど風化され、その事件に係わった人にはある種の「ノスタルジー」さえ生じてくるであろう。ドイツの戦争に対する真摯な反省と、徹底した戦後処理そして歴史教育における明確なコンセプトなどは、多くの番組で取り上げられている。そしてそうしたドイツ的徹底性は、ひるがえって日本はどうなのかという、我々自身の歴史認識のありようを再度問いかける鋭い逆光線となるであろう。近い将来日本

の学校で使用されるであろう歴史教科書が、望むと望まざるとかつて日本と歴史的に深くかかわった周辺諸国にとって無関心ですまされない問題を含んでいるとすれば、そうした周辺国の反応を「内政干渉」の一言ですまそうとする一部の日本人の歴史観に幻滅すると同時に、我々が気づかないエゴ・セントリズムを自覚させる刺激物として、本稿で取り上げる映像資料の持つ意味も新たに生じてくるであろう。本稿では、前回と同様に、ドイツ社会文化にかかわる番組を可能な限り録画し収集したつもりであるが、もちろん取り損ねたものもあるはずである。先回に引き続き、読者諸氏の好意的な情報提供を心から期待する。



注] 録画したテレビ局の略称：NHK（総合テレビ）、ETV（教育テレビ）、BSN（新潟放送—TBS系列）、NST（新潟総合テレビ—フジテレビ系列）、NT21（テレビ朝日系列）、TeNY（日本テレビ系列）、BS1／BS2（NHK衛星第1／第2）WOWOW、その他] なお、前回同様、本稿執筆時（2001年1～4月）の筆者の番組に対するコメントは◆印の後に掲載してある。

ドイツ社会文化論としてのビデオアーカイブズ 2

1995年（平成7年）

125. 「ZEK～ソビエト強制労働秘史～」[1995年1月14日・BS2・45分、製作：トランスバランス・プロダクション／仏・1994年] 1945年5月、連合軍はナチス・ドイツに勝利した。人々は戦争終結の喜びに浸り、戦場に赴いた家族の帰りを待ちわびていた。しかし戦争が終わったにもかかわらず、何百万人もの人々は二度と祖国に戻れなかった。彼らは新たに始まった恐るべき抑圧の犠牲者となった。戦後の混乱の中で連合軍の一部の復員兵たちがたどりついた場所—それはわが家ではなく、旧ソビエト連邦の強制収容所であった。彼

らは囚われの身となりソビエト復興のための奴隷労働に駆り出されることになった。ZEK(ゼック)ーロシア語の俗語で強制収容所に捕らえられた人々はこう呼ばれた。その多くは飢えや寒さや暴力によって命を絶たれた。しかし、ごく少数のZEKは自分たちを抑圧してきた体制よりも長く生き長らえた。そして、今ようやく戦後の歴史が見落としてきた非人道的行為を証言できる時代を迎えた。ー1945年4月、ソビエトはついにヒトラーの牙城ベルリンに突入する。2週間にわたる熾烈な戦いのすえベルリンの国会議事堂の屋根に赤旗がひるがえった。5月7日ドイツは無条件降伏をし、ナチスの第三帝国は瓦解した。西側連合軍とソビエト軍はベルリンで対面、イデオロギーの違いを乗り越えて兵士たちは固い握手を交わし、ともに歌い踊り、そして勝利の杯を酌み交わした。しかし、この時すでにモスクワではある極秘命令が下されていた。それは芽生えただけの東西の友情を踏みにじるものであった。「ソビエトの占領地内にいる外国人を拉致する」ーそれが命令であった。ソビエトの秘密警察と防諜機関の部隊は連合国側の人々を次々に捕らえていった。ナチスの強制収容所から解放されたばかりの人々も恰好の標的となった。ポーランド、オランダ、ベルギー、フランスなどの大勢の民間人が再びとらわれの身となる。またソビエトによる支配を恐れ、西側に逃れ捕虜となっていた200万人の「避難民」も同じような運命をたどる。彼らは連合国側によって送り返される途中で収容所行きの護送車に乗せられた。捕虜となった大量のドイツ兵もロシアの荒野に消えていった。ソビエトの強制収容所に集められたZEKたちー彼らはそれぞれの祖国では、行方不明者や脱走兵として扱われることになり、どの国も共に戦ったソビエトがそのような行為に及ぶとは全く想像もできなかった。番組では5人の元ZEKから生還した人々のインタビューで、旧ソ連時代の非人道的行為の数々が語られる。ソビエト反体制派の象徴的存在であったサハロフ博士は「メ

モリアル」というボランティア団体を設立し、地道ながら ZEK の消息を追跡調査している。ボランティア活動家の一人モロゾフさんは、メモリアルの活動をしているという理由で大学での地位を失った。Q: 「なぜモロゾフさんは地位を失ってまでメモリアルの活動に打ち込むのか」 A: 「ロシアの若者に過去の正しい歴史を伝えるためです」そしていつかは第2のニュルンベルク裁判が行われることを彼は願っている。1986年ゴルバチョフはソ連国内に点在するラーゲリ(収容所)の解体を宣言し、1917年のロシア革命以来70年に及ぶラーゲリの歴史に終止符が打たれた。責任の所在をめぐって過去の抑圧の歴史の清算がようやく始まろうとしている。⇨関連映像資料: 126.

126. 「僕を愛したふたつの国 ヨーロッパ ヨーロッパ」(‘Europa Europa’ 1990年・仏=ドイツ合作) 監督/脚本: アニェスカ・ホランド、原作: ソロモン・ベレル。ナチスの手から逃げ回るユダヤ人の少年ソロモン。身分を隠し続ける彼は、ソ連では共産主義者として、連れ戻されたドイツでは純粋ドイツ人としてふるまい、生命の危機を乗り越えていこうとする。女性監督 A・ホランドは第2次世界大戦にアイデンティティを翻弄された少年の姿をユーモラスに描く。1989年ゴールデン・グローブ賞外国映画賞など多数の映画賞を受賞した秀作。◆「人間の運命は自分で切り開くもの、少なくともその半分は人それぞれの手の内にあるというけれど、果してそうだろうか。それにしても、あまりにも皮肉で、あまりにも偶然が作用しすぎないか。古人の言うとおりに、神様のいたずらなのだろうか。ともあれ、ユダヤ少年サリーの場合はむごい。もちろん実話である。第2次大戦前夜、ドイツに住むサリーの一家はナチスの迫害を逃れてポーランドへ移る。まもなくナチスの侵攻。サリーと兄は両親のはからいでソ連へ向かうが二人は国境ではぐれる。サリーはソ連の孤児院に拾われ、ソビエト共産主義青年同盟の優等生になるが、そ

れの束の間ですぐにドイツ軍に捕らえられる。とっさに「純粋ドイツ人」を装ったこの時から、サリーは運命にもあそばされることになる。たび重なる偶然によって、皮肉なことにナチス青少年団の一員となるのである。自分は一体何者なのか。サリーにも分からなくなる。しかしこれはアイデンティティー喪失の物語ではない。死の恐怖から本能のままに生き延びた少年の話である。ここではユダヤ教徒のあかしである「割礼」がカギだ。しかも彼は女性に(男性にも)愛される。ポーランドの女性監督A・ホランドの冷静なタッチに感心する。ユーモアとサスペンスの加減もいい。民族差別の非人間性を越えた映画には違いない。しかしもっと深く、人間とは何か、歴史とは何かを問いかけた作品だろう」〔引用出典：『朝日新聞』1993年5月1日、秋山登〕

127. 「ドイツ・映画の都の再生～バベルスバークからの挑戦」〔1995年1月14日・NHK・45分〕「嘆きの天使」(1930年)など名画の数々を生み出したベルリンの近郊、かつては東独に属していたブランデンブルク州ポツダムにある「バベルスバーク・スタジオ」にドイツ統一後の混乱期を経て少しずつ復活の兆しが見えてきた。伝統を武器に往時の輝きを取り戻そうという映画人の模索が始まった。映画誕生から100年、ドイツ映画は1920年代に黄金期を迎えていた。それは数々の映画史上の名作が才能溢れる人々によって作られた輝かしい時代であった。ベルリンの中心から南西へ20kmバベルスバークの街に、80年以上ドイツ映画を作り続けてきた伝統と歴史をもつ撮影所はある。ベルリンの壁が崩壊して新しく統一ドイツが生まれると、老朽化した撮影所もその歴史を閉じようとしていた。だが、多くの文化人、政治家、経済人の間にここを新しい「映像メディア・センター」としてよみがえらせようという動きが高まってきた。スタジオが民営化に移行すると同時に総工費1400億円、2002年の完成を目処にして再建計画が始まった。番組ではスタジオの再生が21世

紀のメディア社会に何をもたらそうとしているかを探る。番組の中心となるのは、新たにスタジオ・バベルスバークの社長に就任したニュー・ジャーマン・シネマの旗手フォルカー・シュレンドルフのインタビューである。彼は、戦後のドイツ文学を代表する「ブリキの太鼓」の映画化で1979年カンヌ映画祭でグランプリを受賞、その後活動の拠点をニューヨークに移していたが、ベルリンの壁が崩壊すると即座にドイツに帰ることを決断。ドイツ統一とともに東西の文化の融合を直感したからだという。90年に民営化されてから「スタジオ・バベルスバーク」の社長となった彼は、国の内外に積極的な投資を呼びかけ、ここでは「ネバーエンディング・ストーリー3 (1994年・米＝独)」をはじめとして、いくつかの映画が製作されている。◆80年の歴史を誇るバベルスバークが世界の映画産業の中心として輝かしい歴史を残したのは映画会社 UFA の時代である。かつてドイツ表現主義映画の傑作「メトロポリス (1927年)」をはじめとして映画史に残る多くの傑作を生み出し、ナチスの政権獲得後には啓蒙宣伝大臣ゲッベルスの指導のもとに反ユダヤ主義のプロパガンダ映画が作られる。しかし、この時期にF・ラング、E・ルビッチ、B・ワイルダーなど有能な監督が次々とドイツを去った。第2次大戦後 UFA は廃止され旧ソ連占領軍によって DEFA が設立された。その後1990年のドイツ統一までは旧東独の社会主義イデオロギーに基づく国策映画製作の中心となる。このようにバベルスバークは20世紀のドイツの歴史の荒波をかぶってきた生き証人でもあり、たえず政治と芸術のはざままで揺れ動いてきたとも言える。⇨ 関連映像資料：「ベルリン国際映画祭2001」〔2001年3月30日・WOWOW・55分〕(番組内容は、続稿の中で紹介の予定)

128. 「アウシュヴィッツ～ドイツ人は歴史的事実にどう向き合っているのか」〔1995年2月2日【ニュースステーション】NT21〈テレビ朝日系列〉約8分〕ドイツでは、第2次世界大戦におけるユダ

ヤ人の虐殺を否定することを「アウシュヴィッツの嘘」と呼んで厳しく批判してきた。1994年にはネオナチ対策の一貫として否定発言をただけで3年以下の禁固にするという刑法の改正を行っている。「アウシュヴィッツの嘘」は、ドイツ基本法で保証する「表現の自由」の範疇に入らないというのがその根拠となっている。番組の中でポツダム大学ユダヤ人問題研究所のライナー・エルプ博士は次のように述べている。『「アウシュヴィッツの嘘」は公の場所で議論すべき次元のものではない。これは嘘であり、犯罪行為(kriminale Aktivität)である。決して歴史論争の一つとして扱うべきものではない。そんな意見はユダヤ人を二度にわたり侮辱することになるのである。まして加害者の国にあっては「嘘」は罰せられねばならず、ジャーナリズムの言論の自由とは全く別の次元の問題である』

129. 「木村尚三郎のヨーロッパ文明紀行 2) 都市は自立する」[1995年4月3日『素晴らしき地球の旅』・BS2・50分] ヨーロッパにおける都市の成立は、人々の生きる形としての理念の実現形態であると木村氏は語り出す。そこでは市民(Stadtbürger)は、文字通り居住空間としての都市を市壁(die Stadtmauer)で囲む。ドイツ語のdie Burgは「中世の城砦」を意味しているが、古来は英語のboroughと同一語源で、住民の非難する「逃げ込み城(Fliehbürg)」を意味しており、もともと集住空間としての都市は防御性・戦闘性が高く、市壁の内部では独自の法秩序が構築された。「都市の自由」とは、周辺の在地の封建権力に束縛されずに、新しい現実を作りだそうとする意思が集約されているが、それと同時に住む者に対してある種の同質性も要求したといえる。それに対して、旧ハプスブルク帝国の都ウィーンが他の都市と違って独創的なのは、古くから多民族が流入し、共存してきたということである。共存というよりは、融合しながら固有の文化を形成したと言うべきか。いわばそうした多重文化がウィーン文化の基層にあるのであるが、そ

れは現在も積極的に地域紛争で発生する難民の積極的な受入れ政策に現れていると言えよう。もちろん当然ながら、異質な文化が無制限に流入してくることを快く思わない人も多いことは確かである。2年前、難民受入れを強く推進したウィーン市長ヘルムート・ツイルク氏は、手紙爆弾によるテロで左手を吹き飛ばされるという過激な事件も起きている。番組の中でツイルク氏は次のように語っている。「ニューヨークでは多くの民族が別々に別れて暮らしていますが、ウィーンでは民族同士がお互いに混ざり合って暮らしてきました。難しい問題ですが、この伝統は守っていかなければならない。最近では外国人を排斥する主張も出てきていますが、爆弾テロに屈するわけにはいきません。ウィーンは、これまでどおり共生の道を進んでいくと信じています。」ここには決して無理に背伸びしない自然体としての多文化共存への意思が表れている。番組後半で、木村氏は現在ハンブルク在住の小説家・多和田葉子氏と対談を行い、ヨーロッパの都市生活について意見交流を行っている。

130. 「レールウェイストーリー・ドイツ～超特急」〔1995年5月8日・WOWOW・60分〕ドイツの鉄道総延長は、4万5000kmで鉄道王国の名に恥じない。1994年1月、旧西ドイツのDB（ドイツ連邦鉄道）と旧東ドイツのDR（ドイツ帝国鉄道）が合体し民営化の後にDB（Deutsche Bahn AG：ドイツ鉄道株式会社）が誕生した。標準軌間1,435mm、交流15000ボルトのドイツの超特急ICE（Inter City Express）は、日本の新幹線やフランスのTGV（テージェーヴェー）に比べて操業開始は、東西ドイツ統一の翌年にあたる1991年とかなり出遅れたものの、その完成度は非常に高いと言われている。ドイツには、日本の東京やフランスのパリのような一極集中型の都市がなく、それぞれの地方に散在する中核都市を結ぶためのものとして文字通りのインターシティ（都市間）特急としてICEが生まれた。流線型の美しいデザインの先頭と最後尾の車両が動力車で、

それらに挟まれた真ん中の各車両にはモーターはついていない。ICEは、現在ICE専用の新線が建設中であるが、ほとんどは在来線がそのまま使われている。年間利用者は1200万人で、スピードアップや利用者本位の快適な設備などにより、次第にICEに利用者が集まり始めている。ビジネスマンのためには、あらゆる通信機器を完備した会議室も作られている。番組では、さらに集客力を高めるためのさまざまに工夫されたICE以外の車両も紹介される。ICEは、3500km走行する毎に、車両基地で厳重な車体検査が行われる。このドイツ鉄道技術が誇るICEがドイツ北部で深刻な列車事故を体験するのは、1998年6月のことである。⇒関連映像資料：「検証・ドイツの高速列車事故」〔1998年6月15日『クローズアップ現代』NHK・30分〕(内容は、続稿の中で紹介の予定)

131. 「映像の世紀 (4) ヒトラーの野望」〔1995年6月17日・NHK・75分〕番組は、1929年から1939年の10年間のヨーロッパの変動の時期を映像記録で綴るものである。1929年ニューヨーク・ウォール市街に端を発する大恐慌は世界に波及し、敗戦国として多額の賠償金を背負わされていたドイツを決定的に打ちのめし、人々は強力な政治指導者の出現を渴望する。この時期のアメリカも多くの失業者を抱え、成立まもないソビエト連邦は「プロパガンダ映画」で社会主義の成功を盛んに宣伝していた。ドイツでは600万人を越す失業であふれ、大衆の不満はNSDAP すなわち「国家社会主義ドイツ労働者党」の台頭を準備する。ナチスは、大衆を熱狂させるような様々なイベント(儀式)、ビラやポスター、ラジオ宣伝などさまざまなメディアを通じて大衆の心を掴むテクニックを駆使した。番組では、かなりの時間を割いてヒトラーの演説のテクニックについて分析している。ヒトラー自身は「我が闘争」の中で次のように述べている。「大衆はなかなか理解できず、すぐ忘れてしまう。ポイントをしばって、ひたすら繰り返すべきである」と述べている。他方アジアに

目を転じると、1931年9月に「満州事変」が勃発。日本が帝国主義的利権を持っていた南満州鉄道の爆破事件に端を発する。後にこれは日本軍の謀略であったことが発覚。翌年1932年（昭和7年）2月、日本軍は「満州国」建国を宣言し、満州国執政に清朝最後の皇帝・愛新覚羅溥儀（あいしんかくらふぎ）を据える。明らかな傀儡（かいらい）政府であった。しかし国際連盟は、リットン調査団を派遣し、日本の行動は自衛権に基づくものではないと結論づけた。1933年3月日本は国際連盟を脱退し、国際的に孤立化の道を歩み始める。番組のエピローグは次のようなナレーションで終わる。「1930年代、第1次世界大戦の敗戦国を世界経済恐慌の嵐が追い打ちをかけた。その中から『民族の復興』というスローガンを掲げた一人の政治家が人々の熱狂的な指示によって力を得た。ドイツ国民はアドルフ・ヒトラーに未来を託した。祖国の敗北という屈辱的な体験を境にドイツ民族が世界の勝利者となる道を突き進んだヒトラー。ヒトラーが政権についてからわずか6年、世界が孤立主義を取る中で、ヒトラーの野望は世界を戦争の渦へと巻き込んでいく」。⇨関連映像資料：132.

132. 「ラストエンペラー」(‘The Last Emperor’ 1987年・伊=英=中国) 監督/脚本：ベルナルド・ベルトルッチ、音楽：坂本龍一、出演：ジョン・ローン、ピーター・オトゥール、坂本龍一。清朝最後の皇帝・溥儀の波瀾の生涯を描いた歴史大作。1950年、満州国戦犯として中国本土に護送された元満州国皇帝・溥儀は両手首の血管を切り自殺を図る。薄れ行く意識のうちに、まざまざと過去の情景がよみがえる。1908年、死期の迫った西太后によって皇帝に任命された3歳の溥儀は1000人もの宦官（かんがん）にかしずかれて昔ながらの生活を送る。だが1910年「辛亥（しんがい）革命」が勃発して清朝が滅亡した後も、溥儀には従来の生活が保証された。14歳の時イギリス人のジョンストンが溥儀の家庭教師となり、溥儀の目

を世界に向けさせた。やがて溥儀は、婉容を皇后に文繡を妃に迎えた。1924年ついに溥儀らは馮玉祥軍によって歴代皇帝の居城である北京の紫禁城を追放される。その後、溥儀は日本軍と接近し、満州国の傀儡皇帝となる。戦後は戦犯として9年間の囚人生活を送り、1960年に起きた「文化革命」の時代を生き抜いて最後は植物園の園長として、時代に翻弄され波瀾に満ちたその一生を閉じる。(219分)

133. 「ドナウ・悠久の大河をゆく (1) 黒い森の源流から古都ウィーン～ドイツ・オーストリア～」[1995年7月16日・BS2「素晴らしき地球の旅」・75分] ドナウ川は、ドイツ南部バーデン＝ヴュルテンベルク州に水源を發し、ドイツ国内を約230km 流れているが、国際河川としてヨーロッパでも重要な交通網となっている。番組は、上流の二つの町の間で繰り広げられている「源流論争」から始まり、ドナウ川上流＝若いドナウ(junge Donau)の旅から、いくつかの川沿いの都市を訪ねる。最初はウルム(Ulm)、そして次のケールハイム(Kehlheim)では、ドナウ川とライン・マイン・ドナウ運河が合流する。1992年この運河の完成によって、北海とドナウの河口の黒海との間の船舶航行が可能となった。ドナウ川とライン川を運河で結ぼうという構想はすでに1000年前にカール大帝によって計画された。次に訪れるレーゲンスブルク(Regensburg)はローマ帝政時代に起源を持つ人口13万人の歴史都市である。ドナウ川をまたぐ橋「古石橋(Alte Steinbrücke)」は今から850年も昔の1134年に作られ、今もなお利用されている。次に訪れるのはパッサウ(Passau)、ここはドナウ、イルツ、インの3つの川が合流する都市で、パッサウを過ぎさらに川を下る途中の小さな村では、ドナウ運河反対運動の看板が立っている。[反対の看板: Donau gestaut, Heimat versaut - wir kämpfen gegen den Kanal] これは、蛇行する川を直線化して船舶航行の効率性を高めようという運河建設の結

果、水没するかも知れない農地を抱えている農民による反対運動である。この運動には自然保護団体の若者や、隣国のチェコから参加している人もいる。運河建設を計画しているライン・マイン・ドナウ運河会社の担当者は、自然保護を十分考慮していると主張するが、果して両者の溝は埋まるのだろうか。新たな環境問題を抱えながらドナウ川はやがて隣国のオーストリアに入り、国内をおよそ360km流れて、ハンガリーへと入り、やがて黒海へと至る。

- 134-135. 「映画『ショアー』ユダヤ人絶滅の証言〜クロード・ランズマン監督にきく」〔1995年7月30/31日・ETV・各45分〕『ショアー』はナチスドイツによる迫害から生き延びたユダヤ人と、虐殺にかかわった人物を11年間追いつづけて製作されたドキュメンタリー映画。重い過去を事実として告白するこの映画は欧米で大反響を呼んだ。その映像を紹介しながら、監督のクロード・ランズマン氏が日本の知識人と対論する2回シリーズ。◆クロード・ランズマン (Claude Lanzmann) の略歴：1925年パリに生まれる。高校生時代対ナチス・レジスタンスを組織しオーヴェルニュ山岳地帯での戦闘に参加。戦後ベルリン自由大学講師を経て、1952年以来サルトル、ボーヴォワールらと親交を結びジャーナリストとして活動。一時期はサルトルの秘書も努めた。一貫してイスラエルを支持する立場で多くの論説やルポルタージュ記事を執筆し、反植民地主義闘争にも取り組む。アルジェリア独立運動に対する弾圧を告発し、招集兵に不服従を呼びかけた121人宣言に署名し、この宣言で告訴された10人の内の1人として名を連ねる。

136. 「SHOAH」〔1995年8月13/14/15/16日・BS2・合計9時間30分〕『ショアー』は1974年から11年の歳月を費やして、ナチスによるユダヤ人絶滅の記憶を辿るインタビューを積み重ね、約350時間におよぶフィルムを編集したドキュメンタリー映画である。

‘SHOAH’とはヘブライ語で「絶滅・皆殺し」を意味する。上映

時間が9時間半におよぶこの映画には、過去の記録フィルムはいっさい使われていない。ランズマンは徹頭徹尾視点を現在に置いて、現状のアウシュヴィッツやトレブリンカ、のどかなポーランドの美しい田園を写しながら、それを背景に奇蹟的に生き残った数少ない人々や何らかの形でこの犯罪に手を貸した人たちの証言内容のむごたらしさとの対比を強調する。ランズマンはさらに隠しカメラを用いて、撮影を拒否した元ナチス収容所監督官の取材当初の言い逃れが嘘であることを明らかにするとともに、ユダヤ人がいなくなることによって利益を得た住民の心の中に「共犯者」が潜んでいる事実まで炙りだそうとする。ランズマンは、S・スピルバーグの「シンドララーのリスト」を評して「涙とは一種の快感、カタルシスであり、歴史を忘却していくための儀式である」と述べているが、自分の作品に関しては一切の感傷を排除して事実のみを冷静に直視し、歴史を問いなおそうとしているのだと語る。⇨関連文献資料：「『ショアー』クロード・ランズマン著、高橋武智訳、作品社、1995年。「『ショアー』の衝撃」鶴飼哲・高橋哲哉編、未来社、1995年。

137-9. 「ヒトラーとスターリン～知られざる独ソ関係～ (1) 連携 (2) 密約 (3) 対決」〔1995年8月14～16日、製作：トランスパレンス・プロダクションズ、1995年/仏・各50分〕ファシズムと共産主義の爪痕(つめあと)は、今だに世界のあちこちに残っている。中でも最大の猛威を振るったのがヒトラーとスターリンである。人々に与えた恐怖の大きさでは二人はまったくひけをとらない。二人が生み出した犠牲者は数千万人にのぼり、支配した領域は4万キロ四方にわたる。まさに想像を絶する独裁者という言葉は二人に冠せられるだろう。この巨大なスズメバチとクモは相手を倒そうとする時がやって来るまで一緒に餌を分け合っていた。数千万人の犠牲者は二人が手を組んだその結果でもある。そして時が来るまで表舞台には出ずに闇の中にじっと身を潜めていた。ヒトラーは、スズメバチ

のように獲物を見定めると部下たちに止めを刺させて自分が手を汚さなかった。スターリンは、クモのようにまず糸を繰り出してじっと待ち、獲物がかかった頃合いを見計らって襲いかかり息の根を止めた。二人はそれぞれに別の世界に生きていたが、拠り所とした体制は同じであった。それまで人類の歴史には登場したことの無かった「全体主義」という体制である。番組は、ヒトラーとスターリンの関係について、20世紀初頭の帝政ロシアの時代、レーニンの率いるボルシェビキの革命はロシアのみならず、全ヨーロッパの革命を目指すものであり、ドイツもその標的となる。レーニンの後継者のスターリンも、レーニンの理念をひきついだ。ドイツこそが世界革命の突破口とみなされていたからである。1990年代に入るとソビエト連邦の死亡の後、直ちにその「検死解剖」が行われ、共産主義の体内に深く潜んでいた膨大な記録が掘り起こされ、長い間眠っていた資料が日の目を見るようになった。番組では、歴史学者の分析とかわりて生き残った歴史の現場の目撃者の証言、そして新たな発見資料をもとに、これまでのいくつかの歴史の通説への斬新な再解釈の試みである。⇒関連映像資料：140。

140. 「赤い帝国～庶民が語るソビエトの75年～ ①革命とレーニン ②内戦と一党独裁 ③スターリンの登場 ④大粛清 ⑤ヒトラーとスターリン ⑥スターリン批判 ⑦崩壊する帝国」[1991年6月7/14/21/28日・ETV、製作：グラナイト・プロダクション/英、1990年・各45分] ⇒関連映像資料：「社会主義の20世紀」(前回の原稿で紹介、『法政理論』第33巻第3号 p.102f、2001年2月)

- 141-142. 「ワイツゼッカー・戦後50年へのメッセージ(第1回)過去に目を閉じてはならない、(第2回)信頼の回復のために～日本に向けたメッセージ」[1995年8月17・18日・ETV・各45分] 本年(1995)年8月、ドイツの前の大統領ワイツゼッカー氏が来日した。彼が繰り返して国民に訴えてきたことは、戦争の歴史を直視すると

いうことで、彼はドイツの良心とも呼ばれている。そして今回は自らの希望で広島を見学した。来日にあたり東京で行われた講演内容は、日本人にとっても手厳しい内容を含むものであった。論題は「ドイツと日本の戦後50年」ドイツの大統領は強い政治的権力を持ってはいないが、彼は言葉の力を用いた政治家の一人である。公式に出版された演説は4000ページにのぼる。ワイツゼッカー氏の父エルンストは、ナチス時代は外務次官を務め、1947年に戦犯として逮捕される。ニュルンベルク裁判で、父の裁判の弁護団の助手を務めていた当時法学部の学生であった氏は、裁判弁護のためくまなくナチス時代の資料にあたり、その犯罪性を知るにいたる。それと同時に、父の弁護とナチズムの犯罪の糾弾というディレンマを体験し、それ以後政治家を目指す。やがてCDU(キリスト教民主同盟)から西ベルリン市長を務め、1984年に大統領に就任する。その頃から一種の歴史修正主義の動きがドイツで出始める。一つは「ナチスの行った犯罪はドイツ国民だけのせいではない」という主張である。ベルリン自由大学のエルンスト・ノルテは次のように主張した。『ナチズムはドイツだけに特有なことではない。1917年に成立した共産主義がナチズムを生み出す温床となった』。それと同時に『ナチス時代の犯罪は、現在の世代にその責任はない』という主張も大きく叫ばれている。1985年5月に西ドイツを訪問したアメリカのレーガン大統領は、コール首相とともにピットブルク墓地を訪れる。ここにはかつてのナチスの親衛隊も一緒に葬られていることから、周辺諸国は一斉に反発した。ドイツの孤立化を懸念したワイツゼッカーは、この時期に「荒れ野の40年」という有名な演説を行う。次の箇所は繰り返して引用されるこの演説の核心的部分となっている。『過去を克服することはできません。歴史を変えたりなかったことにすることはできません。過去に目を閉ざす者は、また同じ危険に陥るのです。』今回の東京での演説もこうした姿勢が一貫して貫かれてい

る力強いものとなっている。◆番組の第1回目のゲストは、演説の翻訳に携わった永井清彦氏。日本とドイツの戦後比較の際に、周辺
の国々との付き合いの違いという地勢学的な視点から、ワイツゼッ
カー氏の講演を読み解こうとしている。2回目のゲストは作家の井
出孫六氏。特に永井氏が提起する問題はユニークである。すなわち、
ワイツゼッカー演説に繰り返し述べられるキリスト教的な倫理とし
ての「罪の告白・救済」という概念を我々日本人はどこまで理解し
ているかという疑問の提起と、ヨーロッパにおける「アンティセミ
ティズム」すなわち「反ユダヤ主義」をナチズムの枠組みの中に抑
えることによって、キリスト教文化総体を弁護することにはならな
いのか—という2点の指摘に対して我々は解答を準備する必要があ
る。

143. 「映像の世紀 (8)恐怖の中の平和」[1995年11月18日・NHK・
75分] 1950年(昭和25年)から1964年(昭和39年)頃にかけての映
像資料を豊富に駆使して第2次大戦後の歴史が綴られる。この時期
は、共産主義と資本主義という東西両陣営の「冷戦」として描かれ
ているが、とりわけこの「映像の世紀」第8集では比較的記憶に新
しい映像が数多く登場して興味をそそる。1950年代、まだテレビが
家庭に普及し始める以前は、映画館で上映される「ニュース映画」
が貴重な情報源となっていた時期でもある。◆筆者が最初に記憶し
た世界の大事件は、映画館で上映されていたそうしたニュース映画
による「ハンガリー動乱」である。ソ連の戦車がブダペストの市街
地を走り回り、民衆の逃げまどう光景はいまだにはっきりと脳裏に
焼きついている。このように50年代の世界は、分断と対立という重
苦しい現実をひきずっていたのである。アメリカのアイゼンハワー
大統領は、核の脅威を全面にアジアや東欧での反共軍事網を徹底さ
せ、ソビエトのフルシチョフ首相は、宇宙開発の優位性を背景に挑
発的な外交を展開していた。番組ではフルシチョフが失脚後に録音

した「回想録」をたどりながら米ソの激しい攻防を描いている。

144. 「私説広告五千年史 (9)ヒトラーの魔術」[1995年8月31日・NHK人間大学、講師：天野祐吉(コラムニスト・広告批評家)・ETV・30分] 天野氏は、戦後自ら体験した「墨塗り教科書」から話を始める。これは、戦争遂行のための皇国思想・皇民教育を隠蔽するためのものであった。氏は教科書自身が、ある意味では国家体制の正当性や、国家維持のためのプロパガンダ性を持っていると指摘する。国家にとって都合の悪いものは回収して、新たに教科書を配布すべきであったのだろうけれど、生徒一人一人に戦前の教育の誤りを墨で塗りつぶさせるという手法は、不信感の助長につながるだけで全く下手なものであったと氏は指摘する。そしてその対局にあるものとして、ヒトラーの宣伝広告を取り上げる。それは、当時普及したラジオという大衆メディアの効果的な活用と、彼自身の演説の巧みさであったと指摘する。「ヒトラーは、ことばを男根にしたてて、大衆を強姦した。エックルトが、指導者のタイプとして描いた像は、偶然にも正しかった。『指導者は独身でなければならない。そうすれば、女を味方に引き入れることができるだろう』。ヒトラーにとって、大衆はまさしく女だった。……ヒトラーの演説ぶりについて、下品な冗談がいくつかある。ヒトラーが大演説をぶったあとは『びしょぬれ』になるといったようなものだ。演説のさいにドンチャン騒ぎに酔ったような恍惚状態になることは事実であった。」ヒトラーの演説を評価する際に、一方では宗教的法悦感への類似を指摘し他方では、性的恍惚〔エクスタシー〕との類似を指摘するとき、両者の根っこは意外と一つなのかもしれないとも考えられる。そしてこれが生まれてくるのは言葉で語られる中身(メッセージ)ではなく、語られる声(メディア=媒体)である。つまり「何が」言われたかではなく、「どのように」言われたかであろう。『わが闘争』の中で、ヒトラーが次のように言うときに、彼は演説の力

をよく熟知していたことを示唆しているだろう。「今日、文筆に携わる騎士やうぬぼれ屋はみんな、次のことをよく覚えておいてほしい。すなわちこの世界における最も偉大な革命は、決してガチョウの羽ペンで導かれたものではない、ということ。否、ペンはつねに革命を理論的に基礎づけることだけがのこされている。だが、宗教的、政治的方法で偉大な歴史的雪崩を起こした力は、永遠の昔から語られることばの魔力だけだった」ヒトラーは、演説で「マインド・コントロール」を行った。◆ここから学べることはマインド・コントロールの詐欺性に拒絶的態度を示すだけでなく、人間はそこから逃げきれないという側面も持つということの認識にある。そもそもコントロールされていないマインドはないと自覚し、冷静な距離感を保つということであろう。これは、マスメディア情報を鵜呑みにしないという批判的態度と明らかに共通するものである。

145—146. 「断罪か黙認か 第一章：わが友ハイデッガーはナチ党员だった 第二章：ハイデッガー、わが親しき敵よ」〔1995年10月2／3日・ETV・各45分〕この番組の主題は、ドイツの有名な哲学者マルティン・ハイデッガーのナチス加担問題の社会的影響についてである。番組はハイデッガーとカール・ヤスパースの往復書簡をもとにして、1980年代後半にハイデッガーとナチスとのかかわりを告発したファリアス、それに反論したハイデッガーの高弟ガダマー、そして近年『ドイツからの巨匠』と題する大部のハイデッガー論を書いたザフランスキらのインタビューを配しながら、大戦間から戦後までこの問題を追っていく。◆番組自体としてはとりわけ新事実の発見はないが、哲学者と政治とのかかわりというきわめて生臭い問題に、映像メディアの特性とからめながら入り込むには恰好の話題となりえるだろう。テレビは映像で事実らしきものを提示し、それを瞬間的につまり視聴者に熟考する余裕を与えずに、善悪や価値判断を強いる傾向性をもったメディアであるという認識を鍛えると

いう「メディア・リテラシー」育成のための恰好の教材となるだろうということである。ハイデッガーはナチスに加盟したが故に、その業績が過少評価されねばならないか、それとも政治信条とかわりなく哲学者として正当に評価されるべきかの判断はもちろん番組が方向支持してはならないだけに、この種の番組は視聴者の受動的な視聴態度を拒絶し、なおかつ主体的判断を必要とするものである。

147. 「映画はついに100歳になった (4) 映画とファシズム」〔1995年10月26日・『NHK 人間大学』講師：四方田犬彦 12回シリーズ各30分〕この講座の講師を務める四方田氏の映画を語る切り口は、絶えずスリリングであり続ける。この番組では、主として多くのハリウッド映画で、ナチスの将校や兵士たちはつねに悪役として登場すると話を切り出す。彼は次のように指摘する。『ヒトラーがいたおかげでハリウッドの映画産業が潤ってきたことも否定できない事実である。〔中略〕これまで同様に今後もスクリーンのうえにヒトラーは呪われたスーパースターとして登場することでしょう。ハリウッドの映画産業はアウシュビッツの灰をみごとに黄金に変える術を獲得したといえる』講座の後半では、ナチス・ドイツと映画との関わりについて歴史的に振り返る。天才的な宣伝家として今日の広告産業に影響を与えたナチスの宣伝大臣ヨーゼフ・ゲッベルスも、メディアとしての映画をきわめて重視し、ドイツの大衆の夢と欲望を操作し、秩序づける装置として高く評価したことを指摘する。そして、ナチスとのかかわりを拒否したドイツ表現主義派の監督たちや、ベルリン・オリンピックを撮影したレニ・リーフェンシュタールなどのナチズムとの関わりを論じる。とりわけ、『美しいもの、崇高にして神話的なものを眺めるという彼女(＝リーフェンシュタール)美学そのものが、ファシズムとその本質において競合しあっていたという事実です。ファシズムはつねに人をうっとり魅惑し、忘我の境地に追いやって、神話的な共同愛への帰属へといたらしめ

る力をもっています。その美学のもっとも典型が『民族の祭典』にあるということは映画史的に正当なことです』という四方田の指摘は、芸術や科学が時として国家的犯罪と共犯関係を形成することを示している。その時、戦後のリーフェンシュタールのナチスとの関わりについての自己弁護的な言説はやや説得力を欠いてしまうことにもなるのかも知れない。⇒関連文献資料：「メディア、あるいはファシズム～(1)レニ・リーフェンシュタール論」(吉田和比古)『法政理論』第30巻第2号、1997年。

148. 「ナチズムと科学者の責任～ドイツ遺伝学者ベンノ・ミュラー＝ヒルとの対話～」〔1995年11月16日・ETV・45分〕1995年10月、日本生命倫理学会は、一人のドイツ人遺伝学者を招待した。B・ミュラー＝ヒル氏の来日講演テーマは「優生学から大虐殺へ（1993－1945）」。氏は一貫してナチス時代の医学者の犯した過ちと正面から向き合ってきた。もちろん国内では氏のそうした活動に対する抵抗も根強かったが、1988年ベルリン医師会は、当時の医師たちの遺伝病断種、安楽死、人体実験への関与をようやく認め、ドイツ人自身の過去とナチズムに関与した医師の責任を明らかにする声明文を出した。ベルリンの壁崩壊の前年のことである。番組の最後で氏は次のように締めくくる「遺伝子の違いにかかわらず人間は平等である。もう一度正義が裏切られるならば、科学と人類は崩壊するだろう。私たちは、過去の経験を生かさなければならないし、若い世代もこうした問題を考えて行かなければならない」。◆「優生学」についてナチスドイツは1933年に、断種法を制定して以来、最初の3年間で約22万人を断種した。ナチスは、金髪で青い目のアーリア＝ゲルマン人を一人でも多く増やすために、全国民の個人生活、健康そして出生を管理しようとした。ヒトラーはこれを「人間の国有化」と称している。そして推定で37万5千人が断種されたが、これは当時のドイツの人口の0.5%が手術を受けた計算になる。断種政策の源

流とされる「優生学 (eugenics)」は、1883年にダーウィンのいここにあたる英国の科学者フランシス・ゴルトンが提唱した。ナチスが政権をとるちょうど50年前にあたる。彼はダーウィンの進化論を適用し「優れた人間」を増やす社会改革の実現を基本理念としており、英米社会の一部に徐々に受け入れられていった。これは一種の「生命の価値判断」思想でもあった。彼が考えたのは、優秀な人間から優秀な子孫が生まれ、劣等な人間からは劣等な人間が生まれるというものである。もしそうであれば、よりよい社会を作るためには、優秀な人間が子供を作り、劣等な人間には子供を作るのを遠慮してもらうしかない。そうしないと、イギリスの国力を優秀なまま維持することができなくなるということである。この考え方は、当時のイギリスの知識人の間でかなり流布し、良く知られた文化人も数多く賛同したという。人間が子孫を残すという、地球上の生物としてごく自然の行為を、国家権力の管理下に置くという思想は「優生学」に端を発し、ナチズムはそれをいっそう洗練させ、そして徹底した実践に移していった。ドイツは敗戦後あらゆる優生政策を中止した。ナチスの「優生学」の悪夢は終わったかと思われた。しかしながら、本人の同意のない強制的な不妊手術は、いくつかの国々で戦後も引き続き行われていた。日本では1950年代に優生保護法に基づく不妊手術がピークを迎え、また高福祉国家スウェーデンの汚点(優生政策)が暴かれるのは1990年代に入ってからのことである。

⇒関連文献資料：吉田和比古「メディア、あるいはファシズム (4) 現代の医療技術、内なる優性思想、そして生命の世紀へ」『法政理論』新潟大学法学会 第33巻第4号 p. 1-89. 2001年。

1996年(平成8年)

149. 「オリンピック・センチュリー (Olympic Century) (1) オリンピックの精神 (2) 神話と伝統 (3) 未来へ」[1996年1月1~3日・BS1・各50分] 近代オリンピックの創始者クーベルタンが、

20世紀に行われたオリンピックを近未来の視点から回顧するという形式の番組で、たえず古代オリンピックの精神と形が引き合いに出されている点が興味深い。年代記によれば、第90回古代オリンピックは紀元前420年に開催された。この時エリア人とアテネ人は政治的な策略によって強すぎるスパルタ人をオリンピアの丘から締め出した。スパルタはオリンピック休戦を破ったというのがその理由であった。オリンピアの丘には武装した兵士が立ち並び、スパルタ人の侵入を防ぐ。そこでスパルタ人は別の競技会を開催した。こうした争いの歴史は繰り返すようである。近代オリンピックの初期の100年間、すなわち20世紀にはスポーツの枠を越えた政治的思惑がオリンピックを「利用」した。IOCは、1931年にベルリンでオリンピックを開催することを決定したが、その時点ではナチスが政権を取るとは誰にも予測できなかった。やがて1936年の冬にはバイエルン州ガルミッシュ＝パルテンキルヒェンで冬季オリンピックが開催され、夏の大会のためにベルリンでは10万人を収容するスタジアムが建設される。それは、ゲルマン民族とナチスの第三帝国を讃える一大イベントの様相を呈するものとなる。アメリカ代表団からはユダヤ系の選手を排除するという露骨なことまで行われる。当時のユダヤ系選手の一人マーティ・グリュクスマンは番組のなかで次のように語っている。「後にIOC会長になったアベリー・ブランデーはオリンピック委員会の創始者であり、スポンサーでありそして初代会長でしたが、この委員会は当時ナチスに対して好意的でした。ブランデー会長は特にそうでした。彼はユダヤ人が表彰台に上がることでヒトラーが不満に思うのを避けたかった。それで私が代表から外されたのだと思います」ナチスの実態が少しずつ明らかになってきたにもかかわらず、IOCは次の冬季オリンピックは前回同様ドイツのガルミッシュ＝パルテンキルヒェンに決定するが、第2次世界大戦の勃発で中止となる。12年間中断されたオリッピッ

クは、戦後東西両陣営の「冷戦」をも引きずっていくことになる。そして、1972年戦後初めてのドイツ・ミュンヘン大会では、『ブラック・セプテンバー』と名乗るパレスチナ・ゲリラによるテロ事件が起きる。彼らは、イスラエルの選手村に侵入し2人の選手を殺害、9人の人質をとり、イスラエルに投獄されているパレスチナゲリラや政治犯の解放を要求。ヘリコプターでエジプトに向かう寸前に空港で警官隊と銃撃戦となり、人質のイスラエル・ユダヤ人選手は全員死亡した。⇨関連映像資料：150.

150. 「ブラック・セプテンバー 五輪テロの真実」(1999年・英) 監督：K・マクドナルド、ナレーション：マイケル・ダグラス。第72回(2000年)アカデミー賞・長編ドキュメンタリー部門賞受賞作品(放映日：2001年3月20日・WOWOW・90分)

- 151-156「ヒトラー (1) 煽動者 (2) 独裁者 (3) 私人 (4) 恐喝者 (5) 軍司令官 (6) 犯罪者」[1996年1月6/13/20/27日・2月3/10日、製作：ZDF(ドイツ第2チャンネル)1995年・各45分] 原題の‘Eine Bilanz’はナチス・ドイツの時代に対する収支決算であると同時に、戦後50年間ひたすら過去を反省してきた戦後のドイツ人にとっても過去のツケはきっちり払ったのだという意味での収支決算であるかも知れない。ひるがえって、日本において過去の歴史に対する反省と補償という形の収支決算は未だになされていると言えるだろうか、はなはだ疑問である。いずれにせよ、ドイツの公共放送としてのZDFが、正面からヒトラー像と取り組んだことには、やはり戦後50年という一つの時間的節目に対するドイツ人のとらえ方が反映されていると観るべきであろう。以下では各回の原題を紹介する。(1) 煽動者 (der Verführer) (2) 独裁者 (der Diktator) (3) 私人 (der Privatmann) (4) 恐喝者 (der Erpresser) (5) 軍司令官 (der Feldherr) (6) 犯罪者 (der Verbrecher) ドイツが戦後一貫して行ってきた戦争とナチズムの反省は教育の中で徹底さ

れたものでありそこで形成されたイメージとずれることは許されなかつたはずであり、ナレーションの語り口も、かなりヒトラーから距離を置いた覚めた解説に徹していることがよく分かる。以下、紙面の節約のために2)と4)の概要のみを紹介する。

- (2) ヒトラーはどのようにして、極めて短期間のうちに近代的で経済的なドイツ国家に独裁者としての自分の意思を押しつけることができたのか。彼が政府を超越した最高統治者となるまでの経過を、彼自身の性格分析や官僚たちの言動などから浮き彫りにする。
- (4) ヒトラーを、ギャンプラー・恐喝的人物という視点から眺める。彼の最初の賭けは1935年の3月ベルサイユ条約の軍事条項を一方的に破棄し、ドイツの再軍備を公然と進め、国民にも一般兵役義務を課すことになる。1936年3月7日にはライン川西岸の非武装地帯「ラインランド」に進駐する。明らかな条約違反にヨーロッパ諸国は緊張を高めるが、抵抗は控えめなものであった。西側諸国はドイツをソビエトに対する防波堤と考え、共産主義の進出を妨げるために全体主義の台頭を許してしまった。やがて彼らはその過ちを国民の血で贖うことになる。番組中のインタビューで、オーストリア皇帝の息子にあたるO・v・ハプスブルク氏は次のように語っている。「彼の最大の博打(ばくち)はラインラントへの進駐だったかも知れません。西側諸国にとってもその後の歴史を左右した運命の瞬間であった。あの時ならまだ彼を失脚させることができたはずである。」そしてヒトラーの恐喝者としての本性は、隣国チェコのドイツ系住民の住むズデーテン地方の割譲問題の時の態度で明確となった。ヒトラーはイギリスのチェンバレン首相やフランスのダラディエ首相などから少しずつ譲歩を引き出しながら要求額をつり上げ、最後には隣国のチェコを軍事的に併合するに至る。

21<テレビ朝日系列>・90分] これまで日本からドイツに運ばれた多くの桜の木は、ドイツの大地と人々の心を美しく彩ってきた。番組では桜を中心に、人と花との結びつきなどをテーマに、ロマンチック街道の旅をレポートし、文化の違いを越えて、人々の花に対する思いを浮き彫りにする。街道は、ドイツ南部のヴュルツブルクからアウグスブルクを経てアルプスの麓のフェッセンに至る道。番組の最後でスタッフはベルリンへ向かう。ベルリンではテレビ朝日の「さくらキャンペーン」にかかわる日本とドイツの感謝の宴の模様などを紹介する。出演は、柴俊夫、大島さと子、田村英里子。

158. 「ベルリン～自由という名の悲しみ～」[1996年6月16日・『世界わが心の旅』・BS2・45分] 俳優・三國連太郎(1923-)は、人生のほとんどを俳優として生きてきた。20歳の時には徴兵を拒否し中国大陸に逃亡を図るが警察に逮捕された。それから2年間最下級の兵士として中国戦線に送られた。彼は言う。「私は戦争にいくことがとても怖かった。その理由は自分と縁もゆかりもない人を殺すということがどうしてもできなかったからだ。〔中略〕私は中国に逃げることを手紙で母に知らせた。大陸へ渡る船を待つ間しばらく身を潜めた小さな魚港の芝居小屋で私を待っていたのは私服の警官だった。私を逮捕させたのは母だった」。ベルリンの壁の崩壊直後の1990年に三國は、NHKドラマ「冬の旅」の撮影のためにベルリンにいた。当時一緒に映画作りに携わったスタッフのほとんどは東ドイツの人々であった。それから6年、彼らの生活ぶりが気がかりで再びベルリンを訪れる。俳優として人間を見つめ続けてきた三國が、自らの体験を重ねて国家という集団の中で生きる個人のあり方を考える旅ともなる。「冬の旅」で三國の息子役で出たマルティーン・ザイフェルトさんは「ベルリーナー・アンサンブル劇場」で俳優をしている。6年ぶりの再会を果たした二人は、国家の崩壊や、敗戦といった価値観の大転換を経験したという共通項を基礎として、

国家権力と文化活動の係わり方について議論を深める。さらに三国は、ベルリン郊外のザクセンハウゼン強制収容所跡でユダヤ人俳優のジェリー・ヴォルフ氏と再会。国家的犯罪の罪の重さについて深く思いを巡らす三国の旅は、さらにポツダム会談(1945年)の行われたツェツィーリエンホーフ宮殿へと続く。⇒関連映像資料:59.

「冬の旅(Winterreise)～ベルリン物語」〔前回論文『法政理論』第33巻第3号,112ページにて紹介済み〕

159. 「地球街道『住』番地～メルヘンが似合う風景・ドイツ」〔1996年6月18日・WOWOW・50分〕ドイツの観光ルートの一つ「メルヘン街道」を旅する紀行番組であるが、単なる物見遊山に終わらず、主としてドイツ文化における「住」へのこだわりを綿密に取材している点が特徴となっている。街道の南の起点のハーナウ(Hanau)はグリム兄弟の生誕の地で、マルクト広場には兄弟の銅像が建っている。メルヘン街道はここを起点として北のブレーメン(Bremen)まで600km続く。この街道の見どころは、ドイツ民家の形態を特徴付ける「木組み家屋(Fachwerkhäuser)」が多く保存されている点であろう。ドイツは北国であるために冬は厳しい。外見からは想像がつかないが、古くからの木組み家屋も壁の厚さは50～70cmあり、屋根裏にも最新の断熱材が貼られ快適な居住空間となっている。「ヘッセン州家具センター」は売り場面積が3万㎡もあり、「住」に関する素材がほとんど揃い、日本のホームセンターとは比較にならない。こうした店で市民は自分で素材を選び、余暇を利用して自分たちで手作りの改装をする。なお「日曜大工」を意味するDIY(Do It Yourself)はドイツ語ではMES(Mach Es Selbst)となる。不動産屋で売りに出している木組み家屋は、築200年、7LDKでおおよそ1600万円。木組み家屋は今だに人気が高いと言われる。最近の日本でも伝統家屋に対する再評価の動きが見られ、またその修復技術の継承も話題になっていることを重ねて鑑賞すると、かなり良い映

像情報を提供してくれる番組である。

160—162. 「ドイツ環境産業革命 (1) 包装法が社会を変える (2) 自動車産業が動く (3) 環境監査が企業を変える」[1996年6月24/25/26日・ETV・各45分]

(1) 包装法が社会を変える

21世紀の政治や経済を大きく動かすキーワードの一つは「環境問題」であると言われる。環境問題は、新たな産業革命であるという視点からさまざまな試みが行われているドイツは、ある意味では先駆的な国であると言える。環境に一つの価値観を認めるグリーン経済は、単に利益至上主義の人間の経済活動に大きな価値観の変換をうながすものである。1997年には日本でも包装容器リサイクル法が施行されることになっている。そのモデルとも言えるのがドイツで1991年に施行された「包装廃棄物規制命令 (Verpackungsverordnung)」という法律である。この法律では、包装容器が製造メーカーが責任を持って回収、リサイクルしなければならないと規定されている。番組の第1回目は、この法律が制定されるまでのいきさつを紹介する。中でも注目すべきなのは、DSD というゴミ回収会社を造り、企業の責任でゴミ回収を行うというシステムである。

(2) 自動車産業が動く

ドイツでは、大量生産・大量消費社会を大きく変えようという試みが始まっている。現地報告シリーズの第2回目は、自動車をめぐるリサイクルの話題である。環境月間の6月にあたり世界の最先端の問題認識を知る意義は大きい。番組の中では、自動車の解体業者の作業内容が興味深い。シート、フロントガラスなどは中古品としてプラスチック部分は8種類に分別収集した後で再びメーカーへ送られる。エンジンについては、メーカーが組み立てとは逆の工程で分解して、故障の際の交換用に再利用されるとい

う。メーカーでは、さらに解体しやすく、またリサイクルしやすい車の開発に取り組んでいる。車の設計段階から、廃車となったときの部品の処分の仕方までを考慮した車の開発が行われている。こうした取組は、ドイツ一国にとどまらず欧州全域に拡大しつつある。省資源の時代を先取りするドイツ自動車産業界の取組の熱意は間違いなく伝わってくる。

(3) 環境監査が企業を変える

ドイツの金融業界では新しい試みが始まっている。最大手のドイツ銀行では、低金利の融資を受ける為の条件として「環境監査」を受けて、環境に配慮した企業であるという認定をとることをあげている。環境監査とは、従来の企業に課せられる会計監査のように一種の外部評価制度であり、その基準はEUにおいて1995年4月から実施されたEMASと呼ばれる「環境管理監査規約」に基づいている。番組では、環境監査のもつメリット／デメリットについて、詳しい説明がなされる。具体的事例として取材クルーは、リューネブルク市にある日本の複写機メーカー・コニカの現地工場に入り、同社がEMASの環境監査認定書を受けるまでのいきさつを丹念に取材する。

163. 「私の父はゲシュタポだった」〔1996年8月9日・ETV・45分、製作：SVT／スウェーデン・1995年〕第2次大戦中のドイツ占領下ノルウェー。主人公のペギーはノルウェー人の母とナチスドイツの高官であった父とのあいだに生まれた。彼女は命名もされず、両親の名も知らされないまま、生まれた数日後にはドイツに送られた。純粋なアーリア人の血を引く高官の娘として。いわゆるナチスの支配民族創出計画の一端として計画された「生命の泉」計画による孤児の数は1万人に上ると言われている。しかし関連資料は機密扱いにされ、一般には公開されていない。番組では、まだ見ぬ父の姿を求めヨーロッパ中を旅するペギーさんを追う。彼女の父親はゲシュ

タボの責任者としてユダヤ人絶滅計画を指揮したハインリッヒ・ミューラーだった。彼は多くのナチス高官が「ナチ・ハンター」によって次々と逮捕されるなか逃亡に成功。以後、消息が知れなかったが、今回の取材でついに偽名を使って潜伏していたと思われる場所を捜し当てた。その地は、意外にもローマのバチカン教皇庁だった。

◆「生命の泉 (Lebensborn) 計画」について～ナチス・ドイツは、1940年から45年までノルウェーを占領した。ドイツ兵とノルウェー女性との間にはおよそ1万人の戦争の落とし子たちが誕生した。ノルウェーは、いわゆる純粋なアーリア人による帝国を建設するため好ましい人種とみなされ、ナチス親衛隊はノルウェー人女性との間に子供をもうけることを奨励した。この計画は「生命源計画」の名前のもとで実行に移された。ノルウェーにはドイツ兵との間で生まれた子供や女性を受け入れる施設が8ヵ所用意され、ドイツ人の保母たちが子供の養育に当たった。母親たちは、子供を第3帝国つまりナチスドイツに引き渡すように要求されていた。上級将校の子供はとくにそうであった。やがて多くの子供たちがドイツの孤児院や新しい親元へ連れ去られた。第2次大戦が集結すると、ドイツ兵の子供を産んだノルウェー女性たちは国民の攻撃的となり、多くの女性が収容所に送られた。そして同胞のノルウェー人から非難され、卑しめられ、暴行を受けた。残された赤ん坊は、特別な施設に預けられ、すでにドイツに送られた子供も再びノルウェーに連れ戻された。番組の中のインタビューで作家のW・ウスタド氏は次のように語っている。「ノルウェーの精神医学界には、そうした子供を不道徳な女性と『ドイツ人種』との間に生まれた知的障害児だと主張する一派が現れた。『ドイツ人種』などという言葉が突然生まれた。ある医師はこう書いた『この子供たちがまともな人間に育つことを期待するくらいなら、ドブネズミが人なつっこいペットになることを期待する方がました』と。こうした説のおかげで、戦争の落とし

子たちは、つらい子供時代をすごすことになった。そうした差別は戦後30年にも及んだ」⇨関連映像資料：164

164. 「キクとイサム」[1959年(昭和34年)大東映画] 監督：今井正、脚本：水木洋子。占領軍(進駐軍)のアメリカ兵と日本女性との間に生まれた、占領時代の落とし子である混血児をめぐる問題で、それは戦後日本の最も大きな社会問題の一つとしてサンフランシスコ講和条約締結後、一挙に表面化した。混血児問題は昭和30年代の経済復興期のアクチュアルな問題の一つであった。(117分)

165. 「プロパガンダ・スウィング〜ナチスのジャズバンド」[1996年8月9日・BS1・50分、原題：‘Propaganda Swing, Dr. Goebbels Jazz Orchestra’ - A Film by Florian Steinbiss and David Eisermann (1991年) 製作：スタインピス・アンド・アイザーマン・プロダクション(ドイツ)。フリッツ・ブロックシーパー(Fritz Brocksieper)は、ドイツの偉大なジャズプレーヤーとしてよく知られている。彼は1930年代から活躍したヨーロッパ屈指のジャズドラマーとして映画やラジオ番組で演奏し、第2次大戦中の大ヒット曲『リリー・マルレーン』のドラマーでもあった。だがナチス統治下のドイツでなぜジャズが演奏できたのか。彼は長い間ずっと口を閉ざしていた。ナチスはジャズをアメリカの頹廢芸術として厳しく排斥していたのにもかかわらずである。戦後すぐに、アメリカのジャズ音楽界をリードした数多くの巨匠がシーパーのもとを訪れている。例えば、ライオネル・ハンプトン、デイジー・ガレスピー、カウント・ベイシー、マイルス・デービス、デューク・エリントンなどである。戦争が終わってから半世紀、シーパーは今ようやくジャズ楽団結成の経緯とナチスの文化政策との関わりについて語り始めた。1940年に入ると、ナチスは当時のベルリンの最新設備を誇る短波ラジオのスタジオから全世界に向かって宣伝放送を流していた。戦況が悪化すると、シーパーの楽団は、毎日のように最新のアメリカのジ

ジャズメロディーにのせて連合国を非難する歌詞を流し続けた。短波ラジオ局に雇われていたイギリス人やアメリカ人が英語の歌詞をつけた。じつは、ナチスは政権獲得と同時にジャズの撲滅を目指し、1935年からラジオでのジャズ放送が禁じられていた。ジャズを聴く若者たちは「スウィング・キッズ」として当局に連行された。こうした状況の中でシーパーの率いるチャーリー楽団が堂々とジャズを演奏していたのは、啓蒙宣伝大臣ゲッベルスが、ジャズをプロパガンダに利用したからである。ゲッベルスは、ラジオの海外向け宣伝放送の効果を知り抜いており、「マスメディア」としてのラジオは、ナチスの戦略の中に明確に位置づけられていた。⇒関連映像資料：166.

166. 「スウィング・キッズ」〔‘Swing Kids’ 1993年・米〕製作総指揮：フランク・マーシャル／クリストファー・メレグンドリ、製作：マーク・ゴードン／ジョン・バード・マヌリス、監督：トーマス・カーター、脚本：ジョナサン・マーク・フェルドマン、撮影：ジェーシー・ジェリンスキー、美術：アラン・キャメロン、出演：ロバート・ショーン・レナード／クリスチャン・ベイル／バーバラ・ハーシー。1930年代のドイツ、台頭するナチスの勢力に反抗してスウィング・ジャズに酔いしれ、毎夜自由を謳歌する『スウィング・キッズ』と呼ばれたドイツの若者たちの友情と悲劇を描いた青春映画。ダンスホールで女の子たちの熱い視線を浴びるピーターとトーマス、天才的なギターを腕を持つアーピング。ヒトラー・ユージェント（青年団）とたえず反目していた3人ではあったが、ファシズムという過酷な時代の流れは、それぞれの3人の人生に過酷な試練を与えた。スクリーンを彩るスウィング・ナンバーとエネルギーなダンスシーンは秀逸である。(113分) ◆ナチスを悪者に仕立て、勧善懲悪的なストーリーを作るというのはアメリカ・ハリウッド映画の得意としてきたジャンルであるが、この映画は30年代のド

イツの若者群像をユニークな視点から描いている。なお主演の一人であるC・ペールは、ステイーブン・スピルバーグの製作監督になる167. 「太陽の帝国」(‘Empire of the Sun’ 1987年)の主人公の少年ジムを演じている。スピルバーグは、少年ジムの目をとおして、戦争を描き、戦争が成長過程にある少年の感受性にどんな影響を与えるかを、映像詩として捉えた秀作。欧米列強の租界地・上海で両親とともに暮らすジムは、日本海軍の戦闘機「ゼロ戦」に強く憧れ、いつかはゼロ戦のパイロットになり大空を飛ぶ姿を思い描く少年。やがて日本軍の中国「侵略 (invasion)」が拡大し、ジムの一家も上海脱出の準備をしていたが、時すでに遅く日本軍は上海にも侵攻してくる。否応なく戦争という嵐に巻き込まれ、ジムは逃げまどう民衆で混乱する市街地で両親とはぐれてしまう。なお映画のタイトル名『太陽の帝国』とは言うまでもなく「大日本帝国」のことである。(152分)「ラジオ・メディア」によるプロパガンダの威力については次の番組でよく扱われている。⇒関連映像資料：168.

168. 「なぜ隣人を殺したか〜ルワンダ虐殺と煽動ラジオ放送」[1998年1月18日・NHK・50分] ラジオが大衆操作にいかにも絶大な効果を発揮したかを検証する優れたドキュメンタリー番組の一つである。アフリカのルワンダで1994年に大量虐殺事件が起きた。わずか3ヵ月で人口の一割を越える百万人が虐殺されたとされる。なぜ短期間にこれだけの人が殺されたのか。1993年、ルワンダに「千の丘ラジオ」というラジオ局が開設される。設立にかかわったのは、多数派フツ族の「過激派」と呼ばれる政府や軍の高官たちである。だが、国営放送局から人気DJを引き抜き、流行の音楽を流すなど普通のラジオ局を装いながら、急速に国民の人気を獲得していった。多数派のフツ族が少数派のツチ族を殺したとされるこの事件に対し、国連は特定の民族の抹殺を目的とした犯罪として国際法廷を設置した。民間人が隣人を一斉に殺し始めた事態の背景に、民族対立を利用し

たフツ族の「虐殺煽動放送」があった。ルワンダで拘束された虐殺に加担したとされる容疑者の中から初めて釈放されて村に帰る青年を中心に取材が行われた。死刑に当たる虐殺煽動罪で拘留されているラジオ局のアナウンサーへのインタビューで、彼は次のように語る。「放送とはどんなに間違っただけでも必ず大衆に影響する。千の丘ラジオ放送は武器だった。弾ではなく、言葉で人々を撃ち殺したのだ」ナチスの宣伝啓蒙大臣ゲッベルスの言葉としてもそのまま当てはまるかのような言いぐさには、マスメディアがいかに両刃の剣であるかを思い知らされる。◆この番組はテレビ・ドキュメンタリーのジャンルでは権威あるイタリア賞も受賞。放映局はNHKであるが、製作が民間テレビ番組製作会社の一つ『ドキュメンタリー・ジャパン』である点も注目したい。

169. 「アンネ・フランクの思い出」[1996年8月10日・ETV・110分、製作：ジョン・プレーヤー・フィルム/ディズニー・チャンネル/BBC・1995年]「アンネの日記」は、全世界で55の言語に翻訳されたベストセラーである。ナチスのユダヤ狩りで家族とともに逮捕されたアンネ・フランクは、わずか15歳で強制収容所の孤独と恐怖の中で短い生涯を終えた。ナチズムによる犠牲者1000万人のうち、150万人は子どもであったと言われる。死の直前まで人間性に対する信頼を保ち続けたアンネは、犠牲となった子どもたちの魂の象徴でもある。そしてA・フランクの思い出は、戦後50年を経てもなお当時かわりのあった人々の記憶に鮮明に残っている。番組では1930~40年代、当時のフランク一家と親交のあった友人・知人たちへの丹念なインタビューを軸として、戦争の持つ暴力性・非人道性の一端を炙り出すことに成功している。この番組は、1995年の国際エミー賞を受賞した世界的にも高く評価されたドキュメンタリーである。ナチスが政権を獲得してから5年後の1938年には、隣国オランダも次第にナチスの巨大な影に覆われ始める。ヒトラーは、オラン

ダの警察や官公庁、首相官邸の中にまでナチズムに共鳴する勢力の拡大を図っていた。しかし、第2次大戦前のこの時期において、オランダはドイツからの亡命ユダヤ人に対しておおむね好意的であった。オランダ国内にファシストへの協力者が増えつつある中でも、多くのユダヤ人はオランダはまだ安全だと考えていた。例えばアメリカのようにより安全な国に逃れようとする人はまだごく少数であった。フランク一家の友人・隣人たちはしきりに国外への亡命を勧めるが、オランダの地で新たに事業を起こして成功したアンネの父親はまだ状況に楽観的であった。1939年9月ドイツ軍がポーランドに電撃的な侵入を開始してからおよそ8ヵ月、1940年5月14日オランダはナチスドイツに降伏。ナチスは自分たちの思想や政策をオランダでも徹底させようとし、反ユダヤ的法律が次々と施行され、ユダヤ人の自由は徐々に剥奪されていく。1942年6月12日、アンネの13歳の誕生日の最大の贈り物は一冊の日記帳であった。日記は最初のうちは学校の友達のうち話など、ありふれた日常の記録であった。しかし、その後の数年、彼女は自分の体の発達や性に関する次第につとてくる興味を含めてひそやかな秘密を日記と分かち合う。次第に強まるユダヤ人の弾圧の中で、1942年7月6日フランク一家は秘密の隠れ家に移り住む。秘密の屋根裏部屋に住みはじめてから2年と1ヵ月、匿名の密告電話が一家の運命を決定づけた。1944年8月4日の朝、ナチスの将校が隠れ家に踏み込んできた。第2次大戦中、オランダに隠れ住んだユダヤ人は2万5000人にのぼり、そのうちドイツ軍に発見されたり、褒賞金目当ての密告で捕まったユダヤ人は8～9千人とされている。⇒関連映像資料：170

170. 「アンネの日記」(‘The Diary of Anne Frank’ 1959年・米)

製作／監督：ジョージ・スティーブンス、原作：アンネ・フランク、
脚本：フランセス・グドリッチ／アルバート・ハケット、撮影：ウィリアム・C・メラー、音楽：アルフレッド・ニューマン、出演：

ミリー・パーキンス／アンソニー・パーキンス。世界的なベストセラー「アンネの日記」の映画化。(B&W 150分)

171. 「世界遺産・ポツダムとベルリンの公園と宮殿」[1996年8月18日・BSN(TBS系列・30分)番組の英語名タイトル: World Heritage: Palaces and Parks of Potsdam and Berlin. 世界遺産登録年1990年。ドイツの首都ベルリンとその郊外ポツダムは森の多い、理想的な都市景観を形成し、18世紀の繊細かつ優美なロココ式のプロイセン時代の宮殿が散在する。例えばベルリン市内の「シャルロットテンブルク宮殿」やポツダムの「サンサーシー宮殿」などがそれである。これらの宮殿は、第1次大戦の「宣戦布告の署名」や、第2次大戦を集結に導いた「ポツダム会談」など20世紀ドイツの悲劇を代表する舞台でもあった。番組ではそれらの宮殿にカメラが入りこみ、その細部を紹介しながら、日本への原爆投下が決まったポツダム会談でのエピソードや、戦後、廃墟のベルリンの中で復興に立ち上がった「がれき女」の存在といった秘話も合わせて紹介される。
172. 「ドイツ・バウハウスからすべてが始まった」[1996年8月22日・『世界わが心の旅』・BS2・45分] デザイン評論家・柏木博(50歳)は若い頃に強い関心を抱いたドイツのバウハウスゆかりの都市を訪ねる。「ワイマール国立バウハウス」は初代校長グロピウスが1919年ワイマール(Weimar)に誕生させた実験的な美術学校である。Bauhausは「ものつくりの家」という意味で、芸術と技術が一緒になり、第1次世界大戦で荒廃した大衆の生活の向上を目指した。それは、芸術家と職人と一体となって大衆の新しいライフスタイル創出のための芸術運動でもあった。いわば「元祖・ものづくり大学」と言える。ワイマールに作られた校舎は、80年たった現在はワイマール建築大学として東西ドイツ統一後の若い学生が多く学んでいる。1925年、国立バウハウスは、ワイマール和国の右傾化の中で国からの財政援助が断たれて閉鎖。そんな中、新興都市デッサウ

(Dessau) は、バウハウスの力で街づくりをしようとスタッフを招いた。スタッフとして参加したのはパウル・クレー、カンディンスキーなど。彫刻家オスカー・シュレンマーは舞台美術・衣装・演出などで様々な実験を試みた。バウハウスの教員は「表現主義」の芸術家であり、教育はかなり実験的であり、それはいわば国家意思の実現形態としての管理教育の対局をなすものであり、やがてナチスの台頭とともに1933年に解散させられた。庶民の豊かな生活を目指すバウハウスは、国民を管理する全体主義国家の中で14年で消滅することになる。

173. 「記録することの意味～2人の映像作家の対論」[1996年8月24日・『未来潮流』・ETV・120分] 記録映画作家・土本典昭(1928-)は、1957年岩波映画を経てフリーとなり、以後一貫して記録映画を撮り、これまで水俣シリーズ11作品を含めて30本近い作品を発表しているドキュメンタリー映画作家である。一方、フランスの映像作家クロード・ランズマンは、ナチスのユダヤ人虐殺を生存者の証言でたどった9時間半(映像資料番号:136)の大作「ショアー」が、1995年日本でも公開されることになり一気に知名度が高まる。まず「ショアー」に感動した土本監督が手紙を出し、ランズマン氏も初めて土本氏の映画を見て意気投合し、東京で「ホロコースト」と「水俣病被害」が会うことになる。その出会いの場は東京都港区の国際交流フォーラムで開かれている「ふたつの世界の映画を観る」という催しであった。来日に際して土本氏はランズマン氏を水俣へ3泊の旅に誘った。番組は、水俣訪問、患者との対話、二人の映像コンセプトの意見交換など、映像の中には二人が人間の業を深く見つめようとする緊張感と同時に濃密な時間も塗り込められている。番組後半では、作家・石牟礼道子さんを交えた座談の模様も収録されている。3人の共通認識は、高度に発達した人類文明が20世紀に至って急速に大地や海をむしばみ、大量虐殺を犯したという点

にある。そして、これまでも殺戮の歴史だったが、呪われたとも言える20世紀では、犯罪の質と規模が一変したことを「シヨアー」と「ミナマタ」が示すと考える。水俣病の公式発見から40年を機会にまとまった「最終解決案」という表現は、ランズマン氏にとってナチスがユダヤ人虐殺を意味した「最終解決 (die Endlösung)」と重なっている。たしかに事件としての内容は異なるにせよ、あたかも自然発生的な病気のように「水俣病」と呼ぶ表現に違和感を覚えるランズマン氏は「ミナマタも『人道に対する罪』として裁かれるべきだ」とかなり手厳しい発言をしている。

あ と が き

これまで主として日本のテレビ・メディアを通じて紹介されてきた「ドイツの社会文化」に関する番組を時系列に沿って記録し、将来の研究に僅かでも資することができれば幸いであるとして始めた本シリーズは、本稿を書き上げた2001年4月の段階でようやく1996年の夏までこぎつけることができた。本来の狙いとしては、放映から少なくとも6ヵ月以内に、『法政理論』上にビデオ・アーカイブとして発表することができれば、番組批評ももう少し即時的な内容にすることができるのであるが、それにはまだ若干の時間を要することになるだろう。本稿のまえがきにも記したように、1995年は、第2次大戦終了から50年の年に当たり、テレビ・メディアには、太平洋戦争を含めて先の大戦にかかわる番組はかなり目立ったように思う。しかし、2001年の現時点は、いうところの21世紀の始まりの年にあたり、その事実だけでも50年前の人類の悲劇という事実が急速に記憶から遠のいてしまうには十分であることを実感する。戦争の悲劇の直接体験者は、年を追う毎にこの世界から一人また一人と退場しつつある。歴史は、たえずそ

れが書かれる時点における支配的な価値観にもとづいて合目的性を意図して言葉で記されるという宿命を抱いている。したがって、「あの戦争の目的は間違っていた」と明言する(できる)人と、他方数の上では絶対的な少数者であるとしても、「あの戦争は正しかった」と明言する(しようとする)人と、混在し始めた今日の日本の状況の中で、そして人々が現在の生活に汲々としているならば、いつの日か過去の歴史は、ゾンビ (living dead) のように一人歩きし始める危険性が増していることを強調しておきたい。筆者は「過去の歴史の語り部」にはなりえないが、「時代の語り部」としての資格を十分持っている一人の人間であるとするならば、少なくとも次のことは明言できる。すなわち、過去の歴史は多様に解釈が可能であるにせよ、過去にこの地上で生じた事実だけは変更ないし修正不可能であるということである。映像メディアが取り上げる過去の膨大な記録フィルムからすれば、筆者が、テレビの放映番組を通じて収録したビデオ・テープはごくわずかなものに過ぎないにせよ、「変更され得ない事実の映像記録」の一端を後世に残すことの意味が失われることはないであろう。

[以参考文献

下、吉田和比古「ハイパーテキストとしての『言語と映像』」【新潟大学教養部 続 研究紀要】第25集、p.65-77. 1993年。

稿 吉田和比古「都市の記号論～ベルリン・二項対立の首都再生～」【新潟大学 学言語文化研究】第2号 p. 1-14. 1996年。

吉田和比古／高津斌彰他共著：「オムニバス形式での総合講座『現代都市論』の教育効果をあげる工夫」【大学教育研究年報】新潟大学教育開発センター、第3号 p.133-144. 1997年。

吉田和比古「メディア、あるいはファシズム(1)～レニ・リーフェンシュタール論～」【法政理論】新潟大学法学会 第30巻第2号 p. 1-29. 1997年。

吉田和比古「物語の構造(1)～『昔話』から『現代メディア』へ～」【新潟

- 大学言語文化研究』第3号 p. 1-15. 1997年。
- 吉田和比古「メディア、あるいはファシズム(2)～ドキュメンタリー〔記録〕とドラマ〔物語〕の境界」『法政理論』新潟大学法学会 第32巻第1号 p. 37-74. 1997年。
- 吉田和比古「物語の構造(2)～『昔話』から『現代メディア』へ～」『新潟大学言語文化研究』第5号 p. 131-150. 1999年。
- 吉田和比古「メディア、あるいはファシズム(3)～ドキュメンタリスト・亀井文夫と戦意高揚映画」『法政理論』新潟大学法学会 第33巻第1号 p. 1-34. 2000年。
- 吉田和比古「フォト・ジャーナリズムの戦争報道の歴史とデジタル・メディア時代における新たな課題」『法政理論』新潟大学法学会 第33巻第2号 p. 50-105. 2000年。
- 吉田和比古「物語の構造(3)～映像言語教育としての『メディア・リテラシー』」『新潟大学言語文化研究』新潟大学教育開発センター、第6号 p. 85-100. 2000年
- 吉田和比古「ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ～ドイツ戦後史の映像映像レファレンス」『法政理論』新潟大学法学会 第33巻第3号 p. 66-150. 2001年。
- 吉田和比古／高津斌彰「総合科目『現代都市論』のための『ビデオ・アーカイブ』～教育研究リファレンスとしての映像メディア～」『新潟大学言語文化研究』新潟大学教育開発センター、第6号 p. 5-27. 2001年。
- 吉田和比古「メディア、あるいはファシズム(4) 現代の医療技術、内なる優生思想、そして生命の世紀へ」『法政理論』新潟大学法学会 第33巻第4号 p. 1-89. 2001年。